

印象 1 2 編 — 8 月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

● 春町美月 ●

居眠りしてる人の
手から切符が落ちかけてて
念力でなんとか知らせようとする

* 幼い頃、「念力」という存在を知ると、
自分にその力が備わっているかどうか試
した経験は誰にもあるだろう。

● 西春奈 ●

死んでから
自重を知るかのようにいて
羽虫は部屋の四隅に積もる

* 飛ぶために進化した軽い羽虫の身体
は、死して部屋の四隅に吹き寄せられて
いる。風ともない住人の起こす生活の空
気の動きのために。

● 春町美月 ●

水泳バッグを蹴り蹴り歩いた
あの時のうなじの熱を
今なら孤独と呼ぶだろう

* 夏休みに学校のプールに通う。出席カ

ードも配られる。水着やタオルを入れた透明なバックを手に。しかし、誰もが楽しい訳でもない。バッグを蹴り蹴り通った作者もその一人だろう。うつむき加減のうなじに容赦なく夏の太陽は注ぐ。太陽が炙り出したのは「孤独」だったと今にして気づく。

● ベロニカ ●

あの日の今日
誰かのかわりに今、水を飲む

* 8月6日投稿作。あの日は広島に原爆が落とされた日である。いま、水を飲む意味を自らに問う。

● はすた ●

あの朝も
こんな
晴れやかだったのか

一輪車に乗る少年
ひとり

* これも8月6日作。あの朝は昭和20年8月6日。原爆投下には、天候がよいことが必要だったのである。自転車で遊ぶ晴天下の子どもは現在の姿。こうした日常に原爆はふいに投じられた。

● 西 春 奈 ●

原 爆 が た だ の 遠 く の 雲 だ っ た
祖 母 は 米 の こ と だ け 語 る

* き の こ 雲 を 見 て も 、 そ の 意 味 が す ぐ に
分 か っ た 人 は 少 な っ た ろ う 。 日 々 の 食
糧 こ そ 大 き な 課 題 と し て 、 庶 民 は 生 き て
い た 。 作 者 の 「 祖 母 」 も 、 そ の ひ と り だ
っ た の だ 。

● 春 町 美 月 ●

小 説 を 読 ん で る う ち に
日 が 暮 れ て
薄 闇 の 部 屋 は
ベ ニ ア 缶 の 青

* 気 が つ け ば 薄 暮 の 中 で 小 説 を 読 了 し た
の で あ る 。 視 線 の 近 く に 置 か れ 、 暮 れ 残
る よ う に 色 彩 を 保 っ て い る 「 ニ ベ ア 缶 」
が 印 象 鮮 明 に 時 の 経 過 を 告 げ て い る 。

● 春 町 美 月 ●

最 近 シ ュ ー ク リ ー ム に 似 て き た 父

* 「 シ ュ ー ク リ ー ム に 似 て き た 」 の 比 喩
に 思 わ ず 笑 う 。 ふ わ ふ わ の 体 の 中 に あ る
優 し い 内 面 も 感 じ さ せ る 。 あ わ せ て 「 シ
ュ ー ク リ ー ム 」 な の で あ ろ う 。

● 板 倉 萌 ●

おばあちゃんのように生きたい
家族のために一生懸命
働いてくれたね

* 過去形で語っているから、「おばあちゃん」は亡くなっているのだろう。動物の子育て番組を見て感動するのは、その親の私無の姿である。なぜ子育てをするのか。分かっているのかいないのか。しかし、彼らは一心であり、一途である。この「おばあちゃん」の姿にも重なってくる。

● 佐々木祐輔 ●

歩道の真ん中
きいろいへびの背中を歩く

* 「きいろいへび」は路面に引かれた黄色いラインであろう。それが巨大なへびになり、その上を歩く冒険をする。子どもは日々こんな想像の冒険の中に生きているのかもしれない。

● 細村星一郎 ●

八月が終わる
卵に黄身ふたつ

* 西東三鬼に「広島や卵食ふ時口ひらく」の句がある。この1編はどこかそれを思わせる。割った卵に偶然二つの黄身が入

っていたというだけではある。しかし、遠くで心に響き、沈潜してゆく不安のごときものの存在を感じさせる。

● 春町美月 ●

豊の上に
脚をにゆうにゆう投げ出して
台所のトウモロコシのこと
考えていた

* 「にゆうにゆう」の独特のオノマトペに惹かれる。幼い子どもの人目を気にしない、所在なげな様子と読める。萩原朔太郎の猫、中原中也のぶらんこのような独自のオノマトペの効果を連想する。作者にとって、幼年期は黄金の時間だったろう。

・仕上げに、作者名を調べながら記入していて、その半数に近い作品が春町美月氏であったことに驚いている。多作もさることながら、好調な月だったと思われる。また、8月6日の一連の投稿作は、今までに無かったもので、印象深く残った。